

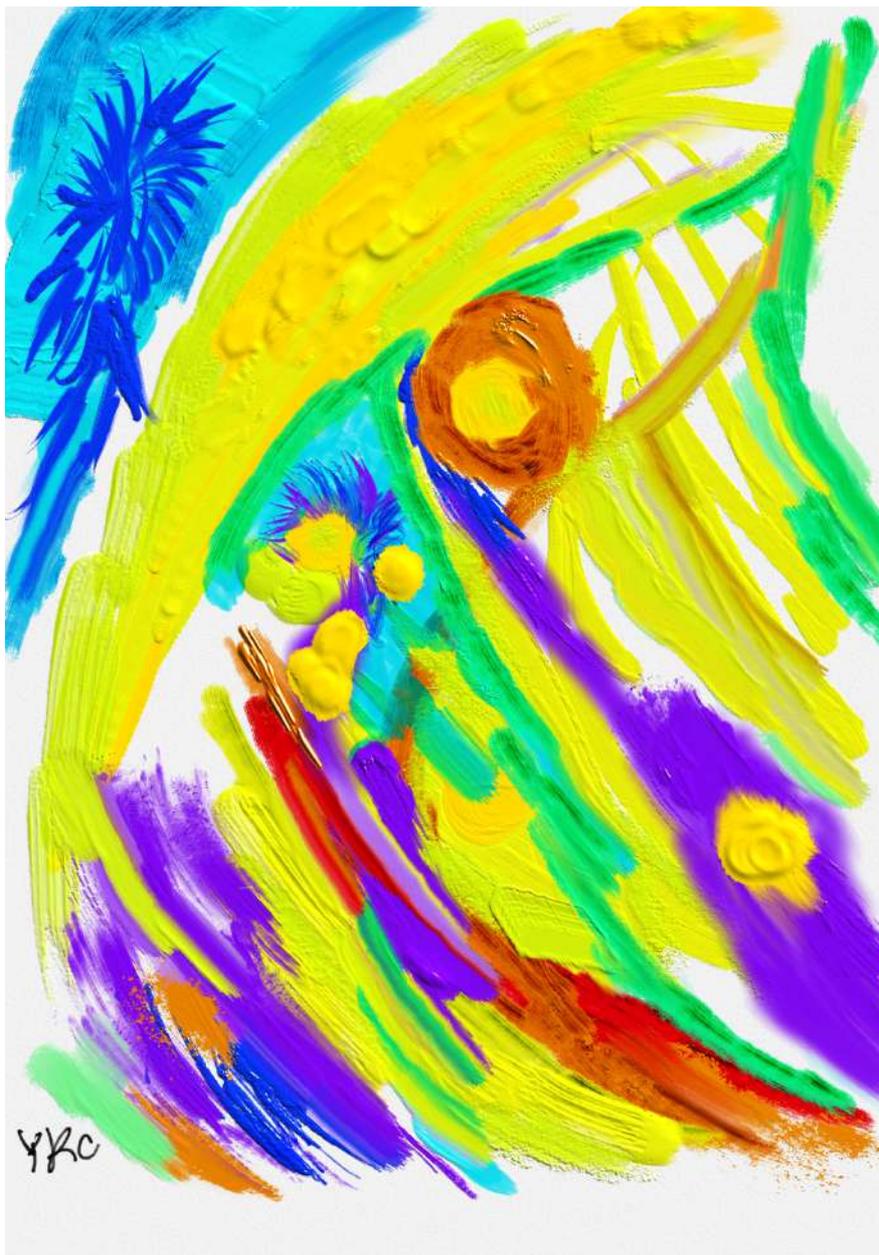
---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 286

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



No.1 自画像\_Self-Portrait

---

---

## 目次

- 5701. 創りに創る生活:デジタルアート教室に関するビジョン
- 5702. パブロフの犬の如し:iPad Proの到着と今日からの絵画創作人生
- 5703. デジタルアート創作の開始から一夜が明けて
- 5704. 新たな挑戦に向けた応援者たち
- 5705. 絵画の創作と密教的ビジュアリゼーションの鍛錬方法
- 5706. 早朝の驚きと今朝方の夢
- 5707. 親愛なる椎茸を描いて:対象を見る眼と絶対色感について
- 5708. 肉眼・心眼・魂眼と肉耳・心耳・魂耳の開発の重要性
- 5709. 創作セラピーとその治癒的・変容的作用について
- 5710. 美と創造の流れ:今朝方の夢
- 5711. 意味世界の治癒と変容:筆との同一化に向けて
- 5712. 今朝方の夢
- 5713. 父の創作活動への期待と家系内の発達現象及び絵画創作に関する幼少期の思い出
- 5714. 愛と創造
- 5715. 命あるものたちへ
- 5716. 自由自在の創作の境地に向かって
- 5717. 毎日を祝日として過ごすことの大切さ
- 5718. 今朝方の夢
- 5719. 活気が戻りつつあるフローニンゲン:自画像を描き終えて
- 5720. 名前に隠された人生の目的

---

## 5701. 創りに創る生活: デジタルアート教室に関するビジョン

iPad Proはまだ配達されてこない。時刻はまだ午前7時半なのだから当たり前である。配達屋さんにはまだゆっくりしてもらおう。デジタルアートを創作したいというはやる気持ちを今は抑えよう。それは今後抑えようのないぐらいに爆発するであろう。

穏やかさ、そして美しさ。自宅の前には、夢見心地にさせてくれるような早朝の世界が広がっている。

小鳥たちは鳴き声を上げ、朝日が照り始めた。つい先ほど、初夏の感じを得た。「ああ、フローニンゲンの初夏はこのようであったか」という懐かしさを感じた。昨日と今日は暖かく、それは初夏を思わせる。これは天からのひとときの恵みなのだと思う。フローニンゲンはまた寒くなり、それは5月末まで続くことがわかっていながらも、こうした一時の恵みを味わう。

天への感謝の気持ちが天に伝わり、さすれば本当に初夏がやってくるだろう。あの輝く初夏がやってくるのだ。

フローニンゲンでの生活も5年目に入ることが信じられるだろうか。にわかにはそれは信じられない。私はフローニンゲンで1年間生活をしたらアメリカに戻り、そこで学術研究を続けようと思っていた。それがどうしたものだろうか。アートの国オランダに捕まえられたのだ。捕まえてもらったのである。

昨夜就寝前に、妙なマントラが自分の脳裏に流れていた。「曲を書いて、書いて、書いて、書いて、書いて、書いて、書く。絵を描いて、描いて、描いて、描いて、描いて、描いて、描いて、描く。創りに創って、創りに創る」そのようなマントラを唱えている自分がいた。意識的な自己ではなく、気付いたら無意識の深層的な自己がそのようなマントラを唱えていたのである。

内的リアリティを自ら創り上げていくこと。他者や社会に内的リアリティを決して作らせないこと。自分の内的リアリティを他者や社会に支配されてはならないのだ。自分の内的リアリティを己自身で創り上げていくこと。それはすなわち、自らの固有の人生を生きることである。逆にそれをしないこと。それはすなわち、自らの固有の人生を放棄することである。

---

---

今もまだ早朝だが、もっと早い時間帯にふと、デジタルアートの創作を教える教室を開いている自分が一瞬脳内に現れた。子供やお年寄りを含めた大人がデジタルアートを自由に創作し、創作過程を楽しむ中で人生をより豊かにしていけるような取り組みができないだろうか。デジタル空間上で作曲と絵画の創作をし、それを他者に共有する形で、相互発達の・相互治癒的な互惠関係のネットワークがこの社会で築かれていけばどれほど良いだろうか。

デジタルアートに従事している自分を想像できただろうか。フローニンゲンにやってくる前の自分では到底想像できない。いやついこの間の自分でも想像できないぐらいだ。

人間は本当に変わっていく。それを自らの人生が物語ってくれている。

正午まであと4時間ほどあるので、その時間は全て作曲実践に充てていく。午前8時半を迎えるまでにすでに5曲ほど短い曲を作った。今参考にしてウオルター・ピストンのハーモニーに関する書籍は、本当に受験数学の青チャートのようなものである。大学や大学院で本物の数学を学ぶための準備として、青チャートの問題を解いて高校数学をしっかり修めようとしているかのような自分がある。

譜例が豊富な理論書を今後も購入し、それを参考にして曲を作り続けていく。まだまだ基礎的な修練の時期である。4月に購入予定の書籍の中には作曲理論に関するものがあり、それらはどれも譜例が豊富である。過去の偉大な作曲家が残してくれた作品には本当に感謝しよう。それらを参考にしながら鍛錬を続け、自分の作曲語法を構築し、曲を通じて自らの人生を表現し続けていく。創りに創る人生はまだ始まったばかりであり、依然として序章である。フローニンゲン:2020/4/6(月)  
07:52

## 5702. パブロフの犬の如し:iPad Proの到着と今日からの絵画創作人生

パブロフの犬の如し。今日の夕方の自分はそのように形容できるだろう。

ついに念願のiPad Proが予定通りに到着した。到着する時刻まではわからなかったが、商品のトラッキングをしてみたところ、商品は注文の翌日にベルギーのブリュッセルに到着し、今日の昼前にアムステルダムから発送された。午後3時頃に一度呼び鈴が鳴り、私の胸は高鳴った。ついにiPad Proが届き、今日から絵画の創作に取り掛かることができる。そのように思った。

---

呼び鈴が鳴ったので嬉しく外に飛び出していったところ、結論から述べると、それは1階の住人の荷物だった…。とんだ喜び損である。しかし、その1時間後に再び呼び鈴が鳴った。今度こそはと思い、呼び鈴越しに配達員の男性が私の名前を確認したので、ついに商品が到着したと思った。今度は正真正銘自分の荷物であった。

配達員の男性は荷物を地面に置き、1.5mほど離れて笑顔で私の身元確認をした。コロナウイルスの感染対策を律儀に守る配達員の男性にお礼を述べ、私は届けられた商品を持って自宅に戻った。

ついに、ついにiPad Proが到着した。だが、その時の私はまだ作曲実践をしており、その曲が完成するまでは箱からiPad Proを出さないことにした。作曲に集中しようとするも、iPad Proが気になり、幾分私はパブロフの犬状態であった。端的には、届けられたiPad Proの箱を見てソワソワする自分がそこにいたのである。そこまで気になるのならいっそのこと箱を開けてしまえばいいものの、最後まで曲を完成させてから箱を開けると決めたため、私は誘惑を押しつけて曲を最後まで作った。

そして、iPad Proの箱を開けた。そこから出てきたのは…iPad Pro！もちろん、iPad Proだ！

この日を首を長くして待っていた。iPad Proを使ってデジタルアートを描くと決めてからは、毎日時間を見つけて、どのようなアプリが良いかを色々と調べていた。

iPad Proが到着する前から、もうすでにアプリの目星を付けていて、絵を描くイメージができていた。具体的にどのようなものを題材にして絵を描くか、そしてどのように絵を管理し、共有していくか。そのあたりのイメージもすでにできていたのである。パブロフの犬のように、食べ物を目の前に差し出され、よだれを垂らしながらもなんとかその場でお座りする犬のような自分はもうそこにはおらず、箱から取り出されたiPad Proの電源を入れる自分の胸は大いに高鳴った。

電源を入れて、初期設定を済ませると、注目をしていた“Art set 4”というアプリをまずはダウンロードした。こちらと“Procreate”というアプリのどちらにするかを悩んだのだが、まずは無料でお試して使える前者をダウンロードした。ダウンロード後、もう1つ届けられた第2世代のApple Pencilを使って、すぐに絵を描いてみた。こちらのアプリは、油絵と水彩絵のどちらもリアルに描ける。

---

早速いたずら書きのように、色々と絵を描いてみると、まるで本物の画用紙に絵を描いているかのようであった。試しにApple Pencilではなく、指で描くことを試してみたところ、指でも描くことができた。しかし、作曲と同様に、今後膨大な量の絵を描いていこうと思っており、そうなってくると、自分の指の指紋がなくなってしまうことが危惧された。これは真剣な心配事だった。指の指紋がなくなってしまうのは困ると思われたので、ここぞという時に指を使って大胆に描くことはあったとしても、普段はApple Pencilを使って描こう。自分の指でも描けるということは大きな発見だった。

そこで一度、天日干しにしていた椎茸の場所を移動させた。その際に、椎茸を指で触った。届けられたiPad Proは新品のため、椎茸の匂いや、ひよっとしたら菌などもいるかもしれないと思ったので、椎茸を触った後にきちんと手を洗ってからiPadのもとに戻った。iPadに対して、こうした気遣いをできればずっとしたいものだ。

今日はもう時間も時間であり、ここから絵を描き出すと夜更かしをしてしまいそうなので、今日も早めに就寝し、明日から本格的に絵を描いていくことにする。肉眼・心眼・魂眼に映る日常の風景を描いていく。

作曲と同様に、1つ1つの絵を、自分が生きた証にしていく。明日からの日々がより一層充実したものになるという確信がある。明日がやってくるのが本当に楽しみであり、これから毎日を生きることがより一層楽しみだ。フローニンゲン:2020/4/6(月)19:45

### 5703. デジタルアート創作の開始から一夜が明けて

時刻は午前6時を迎えた。今、辺りには霧が立ち込めており、外の世界は白色に覆われている。久しぶりに霧に覆われたフローニンゲンを見たような気がする。

小鳥たちがいつも以上に美しく鳴き声を上げている。いつもより数が多く、それはさながら大合唱である。彼らの泣き声は独立しているように思えるのだが、それでいてハーモニーを生み出しているような気もする。1羽の鳴き声が、他の鳴き声の背景に移動し、それによってハーモニーを作り出しているのだ。

---

私たち1人1人の仕事というのもそのようなものなのかもしれない。自らの仕事が他者にとっての背景となり、それが調和を生み出す。本来、1人の人間の仕事とはそうしたもののことを言うのかもしれない。私たちがなすことは、必ず何らかの形で他者に影響を与える。自らの行為や活動が、他者にとって有益な背景になり、それが調和を生み出すように努めていこう。

昨夜、しばらく飯を食べるのをやめにしようかと思った。それぐらいに絵を描くことが楽しいのである。夕食後の日記で宣言していたように、夜にはiPad Proをあまりいじりすぎないように注意をした。注意をしていながらも、一旦絵を描き始めると、もうその虜になってしまって、気がつけば就寝に向けた準備の時間になっていた。いつもより10分ほど遅く就寝準備を始めることになったが、なんとか午後10時前後に床に入ることができた。今夜からもその点には注意したい。

就寝前の時間は寛ぐ時間である。創作活動がいかに楽しくても、早く就寝し、翌日より一層活動に打ち込めばいい。昨日の起床は午前3時半だったが、10分就寝が遅れるだけで、そして寝る直前まで絵を描いていたこともあってか、今朝起床したのは5時半になろうかという頃だった。就寝の時間と就寝の準備がいかに大切かを物語る体験である。

昨日は、まず“Art Set 4”というアプリをダウンロードした。事前の評判通り、本物の油絵を描いているような質感があった。しばらく無料版を使ってみたところ、これは買い切りの有料版に切り替えたほうがいいと思い、1220円でそれを購入した。それによって、使えるブラシの数が一気に増え、色に関しても自分で好みの色を作れるようになった。

夕方にiPad Proを用いて書斎からの眺めを写真に収めた。その写真をもとに、油絵を描いてみようと思った。その時の自分は、モネのような絵を描くという意志に満ちていた。描き始めてしばらくすると、いや一筆入れた瞬間に、その意志はいとも簡単に打ち砕かれた。「難しい…」そんな一言が自然と漏れた。モネのような風景画を描こうとしたのだが、あえなく撃沈してしまったのである。これは相当な修練が必要そうだと、その時に確信した。

作曲同様に、私は絵画の教育を一切受けておらず、絵を描く知識も皆無に等しい。あるとすれば、これまで世界の様々な美術館で数多くの絵画を見てきたという経験ぐらいだろうか。そして、自分の

---

絵を描きたいという強い思いだけだろうか。おそらくそれがあれば十分だ。学術機関での教育など  
いらないのである。

ここからは少しずつ修練を積んでいきたい。いきなり風景画を描くのはハードルが高すぎたので、  
具体物を描くのであれば、あまり複雑ではないシンプルな対象を1つ選んでそれを描くようにした  
い。直感的に、毎日食べている椎茸や、書斎の机の上にあるHappy Buddhaの人形を描いてみるの  
が良さそうだった。それらを描いてみたいという思いが湧いてきたのである。

描きたいという思いを常に大切にしよう。それが絵を描く上で一番重要なことである。作曲に関して  
も同様だ。作りたい曲を作ること。それを今後も大切にしていこう。フローニンゲン:2020/4/7(火)

06:30

#### 5704. 新たな挑戦に向けた応援者たち

デジタルアートの創作開始を祝福してくれているかのような天気が続くフローニンゲン。天も私に味  
方をし、私を応援してくれている。そのようなことを思うぐらいに、ここ数日間は天気がいい。

昨日からデジタルアートの創作に取り掛かり始めた。iPad Proが到着してすぐに絵画製作用のアプリ  
をダウンロードし、早速絵を描き始めた。

「幼児のような絵から始めること」それが出発点である。いかなる知性領域・能力領域においても、初  
期の段階は極めて低いものであり、それは絵画創作の領域においても当てはまる。絵画を創作す  
るのに必要な自分の知性と能力は極めて低い、それが出発点だ。そこから生み出される作品が  
いかようなものであっても関係はない。どんなに稚拙なものであっても関係ないのだ。それを稚拙だ  
とみなす自我及び超自我の声になど耳を傾けてはならないのだ。それらの声を振り払い、愚直に  
描き続けていくこと。それが最も大切なことであり、作曲に関してもそうしてきたのである。

幼児の鳴き声のような、あるいは子供鼻歌のような曲からスタートしたことを思い出そう。それでいい  
のだ。生み出される作品に対する巧拙の判断や評価などどうでもいい。自分は単に創り出すこと、  
創り続けることだけに興味があるのだ。

---

白い霧が深くなってきた。街灯の光が霧を照らしている光景は美しい。そうした風景を描きたいという思いと、そうした風景によって喚起された目には見えない自分の内側の感覚を絵にしたい。

あっ、今、街灯の光が消えた。時刻は6時半を迎え、辺りが明るくなってきたから自動で消えたのだろうか。それとも、街灯の光を描くのではなく、心の中の光に照らし出された景色を描けというメッセージなのだろうか。

小鳥たちも祝福してくれている。いつも以上に彼らが鳴き声を上げているのは、自分への励ましだろうか。

新たな挑戦に乗り出したことに対する祝福と励まし。フローニンゲンの気候にせよ、街灯にせよ、小鳥たちにせよ、自分を取り巻く全ての存在者が自分の味方となって応援してくれている。そんな有り難いことは他にない。

今日と明日までは気温が高く、そこからは再び気温が下がっていく。来週の月曜日からは、また冬に戻ったかのように、最低気温は0度近くになる。救いとしては、最高気温が10度を超えていることだろうか。もう少し暖かくなってきたら、写真撮影のためだけに近くの公園や街へ散歩に繰り出したい。そこで写真を収め、その写真をもとに絵を描いていく。そして、その絵から喚起されたものを絵にしていく。

方向性としては、まずは描きやすい具体的なものを描く修練を積み、慣れてきたら毎日表情を変える書斎からの眺めを大まかに描いていく。それに加えて、夢を対象にしたり、その瞬間の自分の内的感覚を絵にすることは日々行っていく。後者であれば行いやすい。問題は目に見えるものを描くことである。

心眼や魂眼で現象を捉え、それを絵にすることなら比較的容易であるが——技術は未熟だが——、肉眼で捉えたものを忠実に絵として形にしていくことが難しい。もちろん、それを無理に行う必要はない。自分の心を動かしてくれた対象物に対して、しかもそれを描きたいという思いを喚起してくれるものだけ絵を描けばいいのである。今朝も夢の振り返りをしたら、それを絵として表現してみようかと思う。フローニンゲン:2020/4/7(火)06:46

深さを増していく霧。フローニンゲンの街を覆う霧が濃くなっていく。雪が降っているのかと見間違えてしまうぐらいの白銀世界が外に広がっている。この霧によって、コロナウイルスが弱体化してくれることを願うが、それはどうなのだろうか。

昨夜、少しばかり絵を描いてみた。内面世界に立ち現れた自画像と龍の翼のようなものを絵に描いてみた。もっと絵を描きたかったが、就寝時間に近づいてきていたので、その楽しみは翌日に持ち越すことにし、寝室に向かった。

床につき、目を閉じてみると、不思議な体験をした。なんと脳内で絵の続きを描いており、絵の具を混ぜて色が変わっていく様子が鮮明にイメージされたのである。その鮮明な脳内ビジョンは、仮眠中のそれに似た体験であり、仮眠中のそれよりも色彩に溢れていた。密教的な鍛錬方法においても、このように内的ビジョンを鮮明かつ煌びやかなものにしていくものがあるが、まさにそうした鍛錬方法を想起させる。絵画を描くことによって、間違いなくそうしたイメージ想起力が高まり、心的色彩世界が色鮮やかなものになっていくという確信があった。

絵を描いている状態は瞑想状態であり、しかもそこには色彩が伴うという点において、これは密教のビジュアライゼーションの鍛錬方法と酷似しているように思われる。ベッドの上で目を閉じながら、脳内に浮かぶ色彩豊かなイメージを眺めていると、絵を描くことによって、脳の働きが変わるという確信もあった。その効果をすぐに実感したのである。絵を描いた後に、文章を描こうとすると、言葉の出方がいつもと違った。感覚的にそれは大きな違いであった。

今後絵を描き続けることによって、言葉の質感と色感が変化していくのではないかとと思われる。まさに作曲を始めてから自分の言葉に変化があったように、そうした変化が起こるに違いない。ここからの興味としては、自分の脳内の構造をいかように変化させるかという点である。また、それによっていかに内的感覚が変化し、意識そのものにいかような変化をもたらすかということである。探求する事柄が増え、探求の楽しみが増した。

2つほど絵を描き、それを保存した際に、その容量を確認すると、意外と重たいことに気づいた。様々な筆で絵を描いたことが重さの原因なのだろうか。それともファイル形式なのか、そのあたりに

---

---

については再度確認をしておきたい。絵を保存するならJPEGの形式が容量を食わずに一番良いだろうか。

記念すべき最初の作品であった自画像は、様々な筆を試しながら描いた。基本は油絵の筆を使ったのだが、少しばかり水彩画の筆を使ったり、エアブラシも使った。エアブラシは昔父が使っており、私も幼少時代に少しばかりエアブラシに触らせてもらったことがある——絵を描くことにあまり関心がなかったので、エアブラシに触ったのは1回ぐらいかもしれないが——。描く作品に署名を入れようと思い、万年筆を選択し、それで署名を入れた。このように、様々な筆を使うことができる点も魅力的である。

今私が使っているのは、“Art Set 4”というアプリだが、その他のアプリでもそうした筆が使える。ただし、このアプリの特徴はなんと言っても油絵の質感であり、そこに魅力を感じて使うことにしたのである。今後は、描いた絵をどのような保存・共有していくかを考えたい。今日記を公開しているウェブサイト上でギャラリー機能のようなものがあれば、新たにページを作ってもいいだろう。あるいは、私は普段SNSは使わないが、デジタルイラストの共有を目的としたピクシブというSNSがあるようなので、そちらに絵を共有・保存するのもいいかもしれない。この点についてはまた調査をしてみよう。自分が望む形で保存・共有をしていこう。フローニンゲン:2020/4/7(火)07:06

#### 5706. 早朝の驚きと今朝方の夢

霧が刻一刻と深まっていく。時刻は午前7時を迎え、そろそろ霧が晴れてくるかと思っていたのだが、依然として霧が深い。早朝起床したときに霧の出現に驚いただけではなく、もう1つ驚いたことがあった。食卓を見ると、そこに天日干ししていた椎茸が置かれていたのである。

いつもは天日干しをした後にキッチンペーパーに包み、ジップロックに入れて冷蔵庫で保存しているのだが、昨夜はそれを忘れてしまった。それを忘れてしまっていたのは、昨夜は絵画の創作に没頭していたからである。椎茸たちには申し訳ないことをしてしまったと思った。もちろん、すでに天日干しをしている椎茸はそれぐらいでは傷むことなく、元気な表情を見せていたが、彼らにホコリがかかってしまったり、虫が寄ってきたりしたのであれば、それは申し訳ない。昨日に数時間ほど天日干

---

しをしたが、それはまだ完成ではないため、今日も午後に2度目の天日干しをし、それを完成させた  
い。

それでは今朝方の夢について振り返り、それを簡単に絵に描いてから早朝の作曲実践に取り掛か  
りたい。朝の新たな習慣の流れはそのようにする。夢を見て、それを覚えていた時には、まずそれを  
夢日記に記し、その後それを絵に描く。そしてその後作曲実践に取り掛かっていく。夢を言葉に  
し、絵にし、音にしていくことによって、無意識の世界の探求が進み、さらに無意識の世界が豊かに  
なっていくであろう。

夢の中で私は、日本のどこかの大きな都市と欧米の国のどこかの大きな都市が混ざり合ったような  
街にいた。目の前にはホテルがあり、今日からそこに宿泊することになっていた。ホテルの1階の受  
付に向かおうとしたときに、ホテルの前で、小中学校時代の親友4人(NK & SI & SS & YU)がチラシ  
を配っていた。彼らに声をかけ、何のチラシを配っているのか尋ねてみたところ、彼らはオーガニッ  
ク野菜やオーガニックな素材で作られたおもちゃを郊外の小屋で販売しているとのことだった。そ  
れは面白い取り組みだと思った私は、今度そこに案内してもらうことにし、早々と彼らと別れた。

1階ロビーの受付に到着すると、対応してくれたのは若い男性の方だった。その方が予約状況を再  
度確認してくれ、幸運なことに、一番高い価格帯の部屋が空いており、追加料金なしでそこにアッ  
プグレードできるとのことだった。私はその申し出を有り難く受けた。

チェックインを済ませ、目的階の5階に向かおうとしたところ、下に行くエレベーターに乗ってしま  
い、一度地下1階にたどり着いた。そこで数名の中年男性がエレベーターに乗ってきて、1人の男性  
が、「3階お願いします」と私に述べた。私はうなづき、3階のボタンを押そうとしたのだが、奇妙なこと  
に、ボタン表示は5階しかなかった。すると、男性はやれやれといった表情を浮かべながら、押しボ  
タンの横にある何の表示もない緑のボタンを押した。どうやらそれは3階に止まるためのものよう  
だった。気がつけばいつの間にか5階に到着しており、エレベーターの扉の外に出ると、そこはす  
でに高級感が漂っていた。廊下の雰囲気違ったのである。

廊下を歩いて部屋に向かおうとすると、まだ掃除中をしている最中のようにあり、清掃員らしき中年  
女性とすれ違い、その女性に挨拶をした。その方は親切そうな笑顔を浮かべ、「掃除が終わるまで

---

はリフレッシュルームでくつろいでください」と述べた。そのようなスペースがあるらしく、私はそこに向かった。廊下をぐるりと一周している時に不審に思っていたのだが、なぜかベッドが全て廊下に出されており、それらのベッドの質は一級品のようだが、どうやら宿泊客たちは廊下に出されたベッドで寝るらしいことがわかった。プライバシーがあまりないように思われたが、それはそれで悪くないかと思った。

リフレッシュルームに到着すると、そこでは飲み物や軽食を摂ることができた。私はオレンジの入ったフレッシュウォーターを飲むことにし、喉の渇きを潤した。するとそこで、大学時代にお世話になっていた経済学部先生と出会った。そこで先生と立ち話をし、どうやらこれから2階のセミナールームで、大学の卒業生や関係者たちが集まる会があると教えてもらい、私もそれに参加することにした。

先生と一緒に2階に降りると、セミナールームはまだ準備中であり、部屋の前の談話スペースで先生と話をすることにした。テーブルに腰掛け、先生と話をしていると、先生のゼミの卒業生であると思われる男性が私たちに声をかけてきた。その方は私よりも幾分年上のものであった。そこからはその先輩を交えて3人で話をした。その先輩はすでにビールか何かを飲んでおり、少々酔っ払っていた。そのせいか、とても饒舌であり、先輩が内密な話をしてくれた。

その先輩曰く、省庁の優秀な人たちの一部は南米由来のシャーマンの儀式に参加し、その研究をしているとのことだった。それは噂話とのことであったが、確かにそのような可能性はあるなど私は思った。だが先生は、それは根も葉もない噂だと述べ、そこからは黙り込んだ。そして先生は席を立ち、遠くの方の席に座っていた他の卒業生たちと会話を始めた。

私の目の前には依然として少々酒に酔った先輩がいて、私は話の続きを聴くことにした。具体的に、官僚たちがどのような儀式に参加しているのかを知りたかったのである。するとその先輩は、大きな声で話始め、席を移動していた先生がその先輩に遠くから注意をした。

**先生:**「おい、XX(先輩の名前)、もう少し静かな声で話さんか。みんな真面目な話をしているぞ」

「真面目な話」という言葉を聞いたその場の人たちは、どういうわけかどっと笑い出した。

---

私の目の前に座っていた先輩は、先生の注意をそれほど気にしていないようであり、相変わらず酔った感じで席を立ち、フラフラと別の席に移動して行った。その後、先生がまた私のところに戻ってきて、再度先生と話をした。

先ほどの先輩の話を先生はどう思うかについて尋ねてみたところ、先生は小さな声で呟くように話し始めた。先生との会話の中で私は、「神の化身」という言葉を使った。シャーマンの儀式においては、そうした化身を召喚するという点を先生に述べたのである。すると先生は、それは神は存在するという前提に基づいた考えであり、無神論者にとってはその前提は受け入れられないのではないかと指摘された。そのような鋭い指摘をされるのは初めてであったため、私は「神の化身」という言葉について再考を余儀なくされた。フローニンゲン:2020/4/7(火)07:46

#### 5707. 親愛なる椎茸を描いて:対象を見る眼と絶対色感について

時刻は午後7時半を迎えようとしている。つい今し方夕食を摂り終え、今は夕日を眺めながらこの日記を書いている。

今日も気温が高く、1日を通してとても暖かかった。昼前には室内で半袖になることができた。さらには、夕方に買い物に出掛けた時には半袖半パンで出かけることができた。明日もまた気温が高くなるようであり、最高気温は22度に達するとのことである。おそらく正式に春がやってくる前のご褒美のような形でこのような暖かさがあるのかもしれない。今はその褒美を全身で享受しよう。

今日は朝からいくつか絵を描いていた。夢をモチーフに絵を描いたり、咄嗟の思いつきで内的感覚を絵の形にした。作曲と同様に、これからは楽しみながら絵画の創作を続けていきたい。

夕方に買い物から帰ってきてからは、天日干ししていた椎茸を描いた。具体的なものを描きながら絵画の技術を鍛錬する際には、椎茸を繰り返し描いてみるのもいいかもしれない。しかし、椎茸ばかりを描いていると、偏執者—あるいは変質者—に思われやしないだろうか?そのようなことを考えると、思わずクスッと笑みがこぼれてしまう。

---

「油絵を描き始めました」と述べるよりも、仮に椎茸をしばらく集中的に描くのならば、「椎茸描き始めました」と述べる方が正確かもしれない。いずれにせよ、他者がどう思おうと、自分は描きたいものを描いていく。それは作曲と変わらない。

椎茸を注意深く観察しながら絵を描いていると、対象を注意深く観察する力が付きそうだった。作曲においては、注意深く音を聴く力が養われていったのと同じように、今度は眼の鍛錬をしよう。もちろんそれは、肉眼だけではなく、心眼や魂眼を含む。具体的なもののみならず、目には見えないものを心眼や魂眼を用いて注意深く見ることをこれから意識してみよう。

もう一つ、絶対音感ならぬ絶対色感のようなものがありそうだとすることに気づいた。それは椎茸を描いている最中に、光の当たり具合によって色が微妙に変化していることを見て取り、それを表現するための色を作っていた時に気づいた。対象物の色に似た色を作ることは難しかったが、色を作ることもまた創造の1つであり、そのプロセスは楽しいものであった。

絶対音感は多分に生得的なものがあるが、それは後天的に訓練することもできる。その点は絶対色感も同じであろう。対象を注意深く観察し、絵を描いていく実践を続けていけば、その感覚は涵養されていくように思う。実際にそうかどうかは自分で試してみる。

今日は椎茸を描いたので、明日はリンゴを描いてみようかと思う。もちろん、同じモチーフを続けて採用することも訓練になるだろうが、明日はリンゴを描きたい気分だ。アイデアとしては、肉眼で捉えられたリンゴを描き、そのリンゴの魂を心眼ないしは魂眼で捉え、それも合わせて描く。グロス次元のリンゴの背後に、コーザル次元、あるいはさらにより高次元にあるリンゴの魂を描いていくようなイメージを持っている。そのイメージ通りに描くかはまだわからないが、とりあえずそのようなアイデアを持って明日を迎える。それは今日はこれから、曲の原型モデルをいくつか作り、返信の必要なメールに返信して就寝を迎えたい。明日もまた曲を作る楽しみと絵を描く楽しみがある。フローニンゲン:2020/4/7(火)19:36

#### 5708. 肉眼・心眼・魂眼と肉耳・心耳・魂耳の開発の重要性

---

時刻は午前5時半を迎えた。今朝もまた満月が見える。月光がフローニンゲンの街に降り注いでおり、夜明け前の闇とその光は溶け合っている。そうした世界の中で、小鳥たちが美しい鳴き声を上げている。今日も幸福感に満ちた1日が始まった。そのように実感する。

今見える満月を絵に描きたいが、満月だけ描いても幾分味気ないかもしれない。肉眼に見える満月と、心眼さらには魂眼で知覚されるものの双方を描ければと思う。

人はそもそも描きたいと思う対象を見つけた時、それはその対象の外見に単純に惹かれたからではなく、対象に内在する何かに惹かれたからなのではないだろうか。そして、そうした内在的なものを感知する眼がまさに心眼や魂眼なのである。意識の状態の観点から言えば、肉眼・心眼・魂眼は、グロス・サトル・コーザルの意識状態と対応すると言えるだろう。昨夜の就寝前にその点について考えていた。

そこからさらに、それは眼だけではなく、耳にも当てはまるのではないかと思った。つまり、肉耳・心眼・魂耳なるものが存在するのではなかろうかということだ。これらは別に目新しい概念現象でもなく、意識状態の観点からすれば、当たり前のように推測・想定されることである。実際に作曲実践をする過程の中で、それらの次元の異なる耳の存在に気づくことがある。そして、それらが意識状態の変化によって立ち現れたり消えたりするという現象を何度も経験し、様々な意識状態を行き来しながら作曲実践に従事することによって、それらの耳が開発されてきていることも実感する。

これからは、より一層自分の眼と耳を涵養していこう。理想を言えば、その他の感覚器官についてもより開発が必要かもしれないが、今の自分の取り組みに最も関係するそれらの感覚器官を優先的に鍛錬していく。

昨夜ベッドに入った瞬間に、あることに気づいた。それは昨日椎茸を描いているときに、対象物、しかもそれが自然物であればあるほどに、それを形作った形象エネルギーないしは創造エネルギーというものが色濃く存在しており、その流れに沿って絵を描いていくことがポイントなのではないかということだ。わかりやすい例で言えば、木を描く時である。木は種から芽を出し、上に伸びていく。すなわち、木の形象エネルギーは上方向のベクトルを持っているのだ。そうした木を描く時に、上から下に向かって筆を動かすと、思ったように描けないのではないかと思った。仮にうまく描けたように

---

思えたとしても、そこには木本来が持つ形象化エネルギーが顕現しておらず、正気の抜けた絵になってしまう。端的には、生命力に欠けた絵になってしまうのである。

ここから私は、とりわけ自然物においては—おそらく無生物に対しても当てはまるだろうが—、それを形象化したエネルギーに沿って筆を動かすことが、生命力を持った絵を描く要諦なのではないかと思ったのである。これはぜひ今日から意識してみよう。

なるほど、これと似たようなことをルドルフ・シュタイナーも述べていたような気がする。シュタイナーは直接的に絵画の描き方について示唆をしていたわけではなく、万物に宿る生命力ないしは創造エネルギーの存在について述べていたのである。シュタイナーの思想をまた参照してみよう。シュタイナー自身が彫刻家でもあったように、彼の形を捉える眼、そして対象を彫刻の形にしていく能力からは学ぶべきことが多いだろう。

上記の事柄は、何も絵画の創作だけに当てはまるわけではなく、作曲においても当てはまるであろうことを考えていた。つまり、生命力のある曲を作るためには、その曲の題材となる事物さらには内的感覚の生命エネルギーの流れの方向性を見極めていくことが大切なのではないかということである。

ここからは、絵を描く時にせよ、作曲をする時にせよ、万物の生成エネルギーの所在とその方向性に意識を向けていく。そうしたエネルギーの質を見極め、エネルギーが働くベクトル方向を見定めていくのである。それを行うために必要なのが、まさしく肉眼・心眼・魂眼と肉耳・心耳・魂耳の開発である。フローニンゲン:2020/4/8(水)05:55

#### 5709. 創作セラピーとその治癒的・変容的作用について

美しい満月を眺めながら、そして小鳥たちの早朝のさえずりを聞きながらこの日記を書いている。創造活動の新たな幕が開けた。絵画を描き始めてからまだ2日しか経っていないが、そのようなことを感じる。これからはより一層、言葉・音・イメージに焦点を当てた創作をしていく。それ以外のことに時間やエネルギーを使うのではなく、創造にエネルギーを使いたい。ひょっとすると、それはエネルギーを使うというよりも、創造エネルギーとより親密になり、合一化することだと言えるかもしれない。

---

この1年間の自分を見てみよう。大学で行なう純粋な科学研究から離れ、作曲実践を核にした日々を送ることによって、毎日がこれほどまでに充実したものになっていたのだ。それを思うと、これから絵画の創作を加えた人生はより充実したものになるに違いない。

言葉・音・イメージの創造。自分の言葉・音・イメージを形にしていくこと。形を生み出すことそのものが大切なのであって、そこに付随する諸々のことは、二の次、三の次、四の次だ。

自らの形を生み出すことは、自らのリアリティを生み出すことであり、自らの人生を生み出すことだ。自分固有の内面世界を育むこと、及び自分の人生を生きることを放棄した人たちで溢れかえるこの現代社会にあって、そうした流れに対抗していく。自分が生きているのは、まだその程度の人間社会である。ひどく歪みのあり、ひどく抑圧的なこの時代の中で、そうした時代と向き合いながら日々の創作活動に取り組んでいく。

言葉・音・イメージの創作。創作、創作、創作、創作、創作、創作、創作。そして創作。

創作活動にのめり込んだ過去の芸術家たちの中で、創作のためには手段を選ばなかった人たちがいたことを思い出し、今このようにして創作にのめり込んでいる自分からすると、彼らの気持ちがわからないではない。創作のために魂を明け渡すことも命を差し出すことも厭わなかった人間がいたことも、今なら理解できるような気がするのだ。

今このようにして言葉を紡ぎ出しながら日記を執筆していることは、どこかライティングセラピー的であり、作曲はサウンドセラピー、そして絵画を描くのはカラーセラピー的な側面があることに昨日改めて気づいた。作曲と絵画はひとまとめにしてアートセラピーと表現してもいいのかもしれないが、自らの言葉・音・イメージを生み出すことによってもたらされる治癒を総称して創作セラピーと表現してもいいかもしれない。創作にはやはり私たちを治癒してくれる働きがあるのだ。それを強く実感する。そしてそれは治癒だけではなく、私たち自身をさらに育んでくれる変容作用もある。誰しもの内側には、言葉・音・イメージがあり、それは形象化のエネルギーを持っていて、固有の流れがあるのだから、その流れに注目して言葉・音・イメージを形にしていく行為が治癒と変容をもたらすというのはとても当たり前の話である。

---

今日もまた、治癒的・変容的作用が内包された創作活動に取り組む。今日は昼前に1件ほど協働プロジェクト関係のオンラインミーティングがある。それ以外の時間は全て創作活動に振り向けよう。

夜が明け始めた。ダークブルーに変わり始めた空に満月が浮かんでいる。その黄金の輝きに目を奪われる。心眼や魂眼を通じてあの満月をもっと眺めてみよう。そうすれば、きっと何かもっと大切なことが見えてくるはずだ。

この世界の全てのものを心眼や魂眼を通じて眺めること。さらには、万物の中に内在する固有の音ないしは振動を、心耳や魂耳を通じて掴んでいくこと。それを大切にして毎日を生きていこう。フ

ローニンゲン:2020/4/8(水)06:14

#### 5710. 美と創造の流れ:今朝方の夢

輝きを増す満月。不思議なことに、空がダークブルーに変わり始めた今頃の方が月の輝きが際立つ。輝きが増し、月の存在と月光の美しさが増している。存在そのものの持つ美しさと、その存在が置かれたコンテキストによって輝き出す美しさの双方があることに気づく。存在固有の内在美と、それがある特定のコンテキストに置かれた際に発現する美の双方があることをあの満月は語ってくれている。後者についてはその命名をまた考えてみよう。

作りたい曲がたくさんあり、描きたい絵がたくさんある日々を毎日過ごしている。創作したい対象は本当に無限である。その数は尽きることがなく、逆に人生を一步前に進めていけば進めていくほどにその数は増していくかのようである。

創作活動を始めたことによって、本当にこの世界は創造に満ちていることに気づかされる。無数の創造物と絶え間ない創造の流れ。前者に関しては目に見えるものが多いが、後者については目には見えない。だが、本当にそうした創造の流れがこの世界に存在しているのである。ありとあらゆる領域において、そうした創造の流れがあり、それは微視的にも巨視的にも眺めることができる。

昨日改めて、発達科学や学習科学を学んできたことは、作曲や絵画に伴う知性と技術を磨くためだったのではないかとふと思った。そうした繋がりや導きが見えたのである。アートの国オランダにやってきたこともその一環だろう。なぜ自分は縁もゆかりも無いオランダにやってきたのか。答えは

---

簡単であり、そこに縁もゆかりもあったからである。それが創作活動であった。創作に導くものが私をオランダに導いたのである。

以前言及したように、私はアメリカに再度戻って研究を続ける予定だった。その話はことごとく毎回取りやめになり、私はオランダに留まることになった。おそらくそれをもたらしたのは、この国に残って創作活動に打ち込むように仕向けた何らかの力と導きだったのではないかと思う。オランダを永住先の1つに選んだのもそうしたことがきっかけにあったのだ。フィンランドをもう1つの永住先にしようと思っている背後にもそうした力と導きがあるかもしれない。フィンランドではより自然の中に入り、自然をより強く感じながら創作活動に励みたい。オランダとフィンランドの2拠点で生活及び活動をする日はいずれやってくるだろう。

今朝方はあまり印象に残る夢を見ていなかったが、夢から喚起される感覚をこの後絵にしておきたい。夢について覚えていることとしては、夢の中で私は会社のオフィスにいて、そこで編集者の方と話をしていたことだ。その編集者の方に、私は小説家の辻邦生先生の作品を勧めた。最初その方はあまり読む気がなさそうだったが、ひとたび辻先生の作品世界の中に入ると、その世界の虜になってしまったようであり、仕事そっちのけでデスクの上で小説を読んでいた。

私は自分のデスクの上に書見台を置き、そこに楽譜を立てかけて、作曲をしていた。私の右横には若い男性がいて、彼と一緒に曲を作っていた。楽譜とにらめっこして曲を作っている自分の後ろ姿を眺めている自分がそこにいて、自分はあるような表情や姿勢で曲を作っているのだという発見があった。そのような夢を見た後に、まだ3歳児ぐらいのませた男の子が現れる夢を見た。

その男の子は、同い年の女の子を歳不相応な言葉を用いて朝からくどいていた。それは微笑ましい光景だったが、女の子が嫌がっているように思えたので、見るに見かねてその男の子を呼び止め、彼と遊ぶことにした。そのような夢も見ていた。2つの夢から喚起される内的イメージ及び内的感覚を早速今から絵にし、それから作曲実践を始めたい。フローニンゲン:2020/4/8(水)06:37

#### 5711. 意味世界の治癒と変容:筆との同一化に向けて

時刻は午後7時を迎えた。今、フローニンゲンの上空に夕日が輝いている。

---

今日もとても暖かく、初夏を思わせるような気温であった。明日の最高気温は今日のそれよりも7度低い、それでも16度まで達するようであるから、明日もまた引き続き暖かさを感じられるだろう。

長い冬が今ようやく終わりに差し掛かっている。ここから再度気温が下がる日が続く、それが終われば初夏がやってくる。フローニンゲンの清々しいあの初夏がやってくるのだ。生命が踊り、人々も活気づくあの初夏がやってくる。

今朝は満月を眺めていたように思う。今朝の起床は5時前とそれほど早くなかったが、今日はここまですべて充実していたように思う。

本日から新たな協働プロジェクトが始まり、多くの協働者の方と共に仕事ができるようになったことは嬉しい。今回の協働の自分なりの意味付けは、このリアリティの意味世界の治癒と変容に尽きるような気がする。

社会を構築している意味世界の協働編集をしていくこと。それが今日から始まる協働プロジェクトに対する自分なりの意義だ。意味世界の協働編集を通じて、新たな意味世界が少しずつ構築されていき、意味世界に治癒と変容がもたらされるように微力ながら関与をしていこう。そのように思わせてくれる本日のオンラインミーティングだった。

今日は、昨日の夕方に撮影した夕日をもとに油絵を描いてみた。もちろん今わかったら怖いぐらいだが、油絵を描くときの筆の使い方がいまいよくわからない。現在使っている絵画創作ソフトには多くの種類の筆があり、いまいそれらの特性が掴めていないのだ。筆が使いこなせていない自分がいる。

作曲家が音符と自己を同一化させ、一心同体の中で音を生み出すのと同様に、画家も自己が筆と同一化し、筆と一心同体となって絵を描けるはずである。今の自分は二元論的に、自分と筆が分離している状態だ。まだ筆が自分の一部になっていないのである。ここからはそうした二元論的な状態から少しずつ脱却していくことが目標になるだろうか。焦らないこと。作曲を主軸にしなが、それと並行して少しずつ絵画の創作技術を高めていけばいい。

---

日々の作曲実践と同様に、毎日新しいことを試し、その都度新たな発見を得ていけばいいのである。新たな発見をもたらす実験的な実践を愚直に続けていくこと。それが最良の道である。

絵を描き終えて再び作曲実践に戻ってみると、興味深い知覚体験があった。いつもより鮮明に音符に色が付き始め、音に色がちらつき始めたのである。いつも私は、曲を作り終えた後に色彩辞典を眺め、その曲が喚起する色に近いものを選んで曲に付している。だが、その時の作曲実践においては、曲を作っている最中から色彩感覚が強く働いていたのである。これは絵画の創作を始めた思わぬ副産物であった。今後もなお一層のこと、音から喚起される色に意識を向け、音の色彩感覚を涵養していきたい。

作曲と同様に、絵を描き始める前には一呼吸置き、瞑想状態に入ることを本日も意識していた。意識状態を整え、そこから創作に入っていく。作品の巧拙を脇に置くと、いかような意識状態で作品を作ったかによって、その作品が観賞者の意識に及ぼす影響が変わってくるように思える。創り手の意識状態はやはり作品に強く影響を及ぼす。作品から発せられるエネルギーは、創り手の意識状態及びエネルギーに左右されるのだ。

その他にもふと、創った曲や絵をもとに、自分の精神分析ができてしまうことにも改めて気づいた。だが、それをあえて真剣にやる必要はない。創造活動そのものが良いシャドーワークになっている感じがするのである。

内側のものを外側に形にすること。それはシャドーワークの根幹的な原理と同一であろう。創作活動を通じた自他の治癒と変容。それを明日からもまた続けていく。フローニンゲン:2020/4/8(水)  
19:32

#### 5712. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。今朝も満月が見事である。あっぱれな美しさ。ダークブルーの空に満月が輝いていて、月光を浴びた小鳥たちが歓喜の歌を奏でている。満月を眺め、小鳥たちの合唱を聴きながら夜明けを待つ。

「ゴッホ、ゴッホ、ゴッホ」昨夜就寝前にそのような言葉が漏れた。

---

ゴッホは弟のテオとの絶え間ない交流の中で絵画道を求道者の如く歩んでいった。ゴッホの手紙が全て収められた図鑑的全集が手元にあるのだが、それを読み進めていくと、弟テオとの手紙でのやり取りには心揺さぶられるものがある。テオの献身的な励ましと支援。ゴッホにはそれがあった。

「テオ。君と僕は二人三脚で絵を描いているんだ。これらの作品は全て僕たちが一緒になって描いたんだ」翻訳するとそのような言葉をゴッホはテオに宛てた手紙にしたためていた。

作曲にせよ、絵画の創作にせよ、私は誰からも教えを乞うことをせず、誰からも支援を受けていない。自分は独りで己れの道を歩んでいるように思えたが、自分は森羅万象から励ましと支援を受けているのだと悟った。すると、すぐに眠りの世界にたどり着いた。今朝方は印象に残る夢を見ていた。

夢の中で私は、イタリアにいた。どこの街かまではわからなかったが、イタリアであることに間違いはなく、元日本代表のサッカー選手がどこかの街で参加型のアートイベントを開催するとのことだった。ひよんなきっかけで、私もそのイベントに参加することになった。イベント会場に到着すると、そこには和を感じさせる庭園があり、庭園の周りに様々なアート作品が展示されていた。

モダンアートをそれほど好まない私からすると、そこで展示されている作品にはそれほど心が打たれなかったものの、その場の雰囲気は良かったように思う。イベント会場を後にしようとした時、私の横にいた女性が、今回のイベントは思ったほど人が集まっていないということを聞いた。特に日本人の来場者が少ないとのことであった。そこで私は、どのような企業がスポンサーになっているのか尋ねたところ、教えてもらったスポンサーでは集客はそれほど見込めないと納得した。しかし私は、果たして広告宣伝の問題なのかと疑問を持った。問題は別にあると思ったのである。

その後、今回のイベントを開催した元サッカー選手が蔵書を寄付したと言われている小学校に足を運んだ。いや、気づけばその図書室にいたのである。

図書室の左の隅のコーナーにその方が寄付した蔵書がずらりと置かれていた。奥側は全て和書であったが、手前側は英語の書籍が多く、最も手前にはイタリア語の書籍があった。その中でも私は、画家のクリムトが書いた小説に目が止まった。現実世界においてはクリムトは小説など書いていな

---

いと思われるのだが、そこには確かに彼の小説作品があったのだ。そして、私もその作品を自宅の本棚に置いていると夢の中の私は思った。

小説の背表紙を少しばかり眺めてから、さらに奥側の書籍を見に行こうと思ったところ、幾分はしゃいだ中年の外国人女性が本棚にやってきて、棚に置かれていた香水の香りを嗅ぎ、それを巧みな日本語表現で言い表した。私はそれを聞いた時、思わず笑いで吹き出してしまった。それぐらいに見事な日本語であり、尚且つ生粋の日本人ではあまり思いつかないような表現だったのである。私はその女性に挨拶をし、そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は見知らぬ高校の教室にいて、姿は見えないながらも教室の背後から授業を観察していた。その学校はおそらく海外の日本語学校ではないかと思う。ちょうど私は、高校1年生の教室にいて、彼らはドイツ語を学んでいた。高校生でも第二外国語を勉強するのかと感心したが、彼らはドイツ語の学習になかなか苦戦しているようだった。

その後、数学の授業となり、先生が宿題の答え合わせを始めた。列の順序に関する論理パズルのような問題が宿題になっていたようであり、それは問題文をきちんと理解すればとても簡単なものなのだが、如何せん生徒たちは海外で暮らしているため、日本語が少し弱いのかもしいと思われた。

すると突然、私はその学校のグラウンドにいて、今からサッカー部の練習が始まるようであり、その練習を見守ることにした。期待の新人として入学したある高校1年生の男子生徒は、上の学年たちの屈強な身体と渡り合っていくことに苦戦しているようであり、ひどくもどかしさを感じているように思えたことが印象に残っている。フローニンゲン:2020/4/9(木)06:36

#### 5713. 父の創作活動への期待と家系内の発達現象及び絵画創作に関する幼少期の思い出

闇は晴れ、辺りは明るくなった。明るくなったにもかかわらず、まだ満月が空に浮かんでいて、朝空と見事な調和をなしていてとても美しい。写真に収め、後から絵に描きたいぐらいだ。そして実際に写真を撮りに窓辺に近寄り、iPad Proのカメラモードを立ち上げてみたところ、どうもその美しさが画面に現れてこないと思った。

---

写真にしてしまうと消滅してしまう美というものがあるらしい。今日の前に顕現している美は、この肉眼で十分に味わい、その背後にある美は心眼で味わっていく。審美眼というのはひょっとすると、肉眼を超えて、心眼や魂眼のことを述べているのではないかとふと思った。

その他にもふと、この秋に一時帰国した際には父に絵画のことについてあれこれ聞いてみようと思った。昨年の秋以降、父がどのような活動をしているのか不明であり、そこには何かしらの創作活動があるのではないかとと思われる。

私はいつも父の創作活動に期待をしているのだが、その期待を伝え過ぎることを父は嫌がっているようなので、そうしたプレッシャーはあまりかけないようにする。

3歳ぐらいの時に、「お父さん、絵本を描いてよ」という言葉を父に述べたらしく、その言葉がきっかけで父は絵本を描き始めたというエピソードを、ある新聞の誌面上で掲載された父のインタビューを読んで知った。それを知ったのは、アメリカから引き上げた年に父方の祖母の家に訪れたときのことだった。今私が父の創作に期待しているのは、あの頃の気持ちと同じである。父が創り出す作品を純粋に見たいだけなのだ。

1羽の鳥がほのかなラベンダー色の空を舞っていく。

そういえば、家族の構成員単位で発達度合いを見ていくと、うちの家系の場合、確かに次の世代はより質的に進化を遂げた価値体系を持っているように思われる。前の世代の価値体系を乗り越え、そこに質的に一段深い価値体系を築き上げている次の世代たちの姿を思った。もちろん他の家系においては、発達が停滞したり、逆に退行してしまっているような例も多々あるだろう。しかし少なくともうちの家系に関して言えば、漸次的な発達の歩みを進めてきたことがわかる。そのようなことを考えながら大麦若葉のドリンクを作った。

今朝方いつものようにパソコンを立ち上げると、ソフトウェアのアップデートの通知が現れ、すぐにアップデートをした。それに時間がかかることが見込まれたので、日記を書くよりも前に絵を描き始めた。結果として、2枚ほどの絵を仕上げることになった。そう言えば、小さい頃に私は意外と絵を描いていたことを思い出した。特に小学校の低学年の時である。自由帳に絵と呼べないような絵を熱

---

心に描いており、母にはそれらの絵を「ぐちゃぐちゃがき」と呼ばれていたことを懐かしく覚えている。

自由帳の白紙のページは1つの創造空間に変わり、そこで私はぶつぶつ独り言を述べながら自分が思い描くものを描いていたように思う。描いた怪獣や動物などを動かしたり、戦わせたりしていたのである。そのような思い出が蘇り、実は今でも手が動くままにぐちゃぐちゃ描くことが好きであることに気づいた。今朝方の2枚も思うがままに描いたものだ。そしてそれは作曲においても同じである。思うがままに音を生み出している自分がいるのだ。

確かに音を生み出す背後には理論的なものがあることが多く、参考になっている楽譜や譜例には、本当に驚くほどに精緻に作られた音楽世界があることによく気づくのだが、そうしたものを参考にしていくと、内側の感覚に任せて音を生み出したいという衝動が姿を表してくることがある。こうした衝動を大切にしていこう。おそらくそれこそが、自分なりの創作語法の大切な拠り所なのだ。フローニンゲン:2020/4/9(木)07:02

#### 5714. 愛と創造

言葉・音・イメージが溢れ出す。溢れ出した言葉・音・イメージに向き合うと、再びそこから言葉・音・イメージが溢れ出す。世界は言葉・音・イメージで満ち溢れている。内面世界はそれらの産物であり、それは絶え間ない創造を繰り返している。

今朝も早速2枚ほどの絵を描いたのだが、やはり今の私は油絵に惹かれているようだ。先日試しに、水彩画の筆やエアブラシなどを使ってみたところ、それらもまた興味深い道具なのだが、複数の種類のブラシを使って絵を描くと、どうやらファイルの容量が重たくなってしまうようであり、当面は油絵専用の筆に絞って活用することにしたい。

昨夜も就寝前に歯を磨きながら、筆といかに親しくなっていくか、いかに筆と一体化するかが肝要であることを考えていた。昨日絵を描いている時には、ベタ塗りを多用していたのだが、点を打つような形の筆使いを覚えた方がいいのかもしれないと思わされた。筆をいかに活用するかに関しては、自分の好きな画家たちの筆致を画集で確認してみよう。そして今後は、画集からだけではなく、

---

実際の美術館で実物の作品を見る中でリアルに筆致をこの目で確認したい。その際には、単純に筆致の外形だけを見ていてはならない。筆致の背後にある画家の身体感覚と身体運動そのものを見ていくようにするのだ。

これと似たようなことを作曲実践においても行っている。楽譜や譜例を参考にする際には、作曲家の身体感覚と音を生み出す身体運動そのものを知覚するようにしている。音を生み出す息遣いまで感じられるようにしているのと同様に、画家の息遣いまで知覚できるように観察をしていこう。こうした観察と学習の大切さを書き留めておくことは自分にとって大切だ。なぜなら私は人や書物から学びを得ようとするよりも、何でもかんでも実践を通じて遠回りしながら学び取っていこうとする傾向があるからである。それはそれでいいのだが、他者が積み上げてきたことで参考になることは全て取り入れていこう。

一昨日、この秋に一時帰国する際に実家に滞在させてもらう旨を母にメールした。そのメールの返信の中で愛犬について言及があり、彼はもう14歳になったとのことである。食事の量が少なく、いつも決められた量のものをおかきか、愛犬はいつまでも見た目が若い。無駄に食べないことが若さを保つ1つの秘訣であることを愛犬は教えてくれた。

そんな愛犬の写真を父に過去に送ってもらったことがあった。私がアメリカにいた時にそのようなお願いをした。その時私は、1~2枚ほど写真をもらえれば十分だったのだが、30回に分けたメールに100枚ほどの写真が送られてきたのを懐かしく覚えている。

その中でもお気に入りの写真を昨日見つけたので、近々それらの写真をもとに愛犬を描いてみようと思う。愛の力と創造の力について昨夜考えており、愛すべき対象を作品にしたり、愛すべきものを思いながら作品を作ると、何か特別な創造力が宿るのではないかと思われたのである。それを実証する意味でも、愛犬を含め、愛すべきものたちを対象にして曲や絵を創作していこう。愛と創造は密接に関係しているはずだ。

木々にとまって鳴き声を上げる小鳥たちや、遮るものが一切ない青空を舞う鳥たちの気持ちがわかる。今の私は彼らと同じような気持ちで毎日を生きている。この現代社会において、いかような内面

---

世界を形作ることができるのか、そしていかように外側の世界へ関与できるのか。それを自らの人生をかけて探求・実践していく。自分にできるのはそれくらいしかないのだから。

人間はいかようにこの社会的リアリティの中で生きられるのか。いや、そうした虚構的構築物を超越しながらにして地に足をつけていかに生きることができるのか。そのことを日々の生活を通して実証していこうと思う。こうした社会の中で1人の人間としていかに生きることができるのかの実証。私が毎日行っていることを突き詰めれば実はそれなのだろう。フローニンゲン:2020/4/9(木)07:24

### 5715. 命あるものたちへ

時刻は午後7時を迎えた。今日も大いなる充実感と共に時間が過ぎ、そして現在に至る。

今、夕日が燦々と輝いている。今日もとても素晴らしい天気だった。

明日も晴れるようであり、ちょうど街の中心部のオーガニックスーパーに立ち寄る必要があるので、明日はiPad Proを持っていき、フローニンゲンのシンボルであるマルティニ塔を写真に収めたり、その他の教会の写真収めたい。さらには、中心部の市場の写真や、道中に出会うであろうアヒルや小鳥たち、さらには美しい草花などの写真を撮ろう。それらの写真をもとに、また絵を描いていきたいと思う。

肉眼で見える対象物と、その背後にある命を描いていこう。マルティニ塔のような無生物にも命はあるのだ。それはいつも力強く躍動している。

作曲実践を始めた当初において、まずは理論など一切学習せずに思うがままに音を並べてみて、何がうまくいかないのかという体験をいくらか積んだ後に理論の学習を始めたのと同じように、まずは思うがままに絵を描いていき、ある程度うまくいかない体験を積んだ後に理論の学習をしていこう。理論が先ではなく、実践が先であり、苦戦する体験を数多く積むことが大切になる。油絵を描くコツのようなものが必ずあるはずであり、まずはある意味失敗体験を豊富に積んだ後に理論学習に入っていく。おそらくネット上に油絵の描き方に関する動画がたくさんあるであろうから、それらをいづれ視聴したい。今はまだとにかく思うがままに絵を描いていく時期だ。

---

試行錯誤はいつまでも続くが、何か新しい試みを始めた時に、大抵の人はうまくいかないことにもどかしさを感じ、いつの間にかその実践から離れてしまう。言い換えると、多くの人たちは、うまくいかない体験に対する意味付けを誤り、その体験の中に面白さを見出せないがゆえに、気づいた時にはもうその実践領域にいないのである。

それを考えると、意味付けの重要性は大きい。また、一見するとうまくいかないことの中にうまくいったことを見出したり、うまくいかなかったことから次につながる発見をし、その発見を喜べるようなマインドセットのようなものが大切なかもしれない。

早朝にふと、自分の内面世界を訪れてくれた音と絵画的イメージを無視するわけにはいかないということを思った。それらにも固有の命が宿っていて、彼らからの問いかけに耳を傾け、それを曲や絵の形にしていく。それが彼らの命と存在に対して敬意を表す行為である。

命あるものの命を描いていくこと。絵においても曲においてもそれを大切にしたいと思う。

作曲理論書の譜例を参考にすることは、作曲家の感性を取り入れていくこととパターン認識を養うためであり、原型モデルを用いた作曲でそうした感性やパターン認識を自分なりの曲の形にしていく実践が続く。ここ最近では譜例を参考にすることの中に大きな楽しみと喜びを見出しており、今日もまた譜例の再現を楽しんだ。

そうした地道な実践のおかげもあり、ここ最近参考にしているシューマン、バッハ、ブラームス、シューベルトたちが体現していた固有の身体感覚が分かり始めてきた。彼らの身体感覚及び音楽世界をより深く理解するために、明日もまた譜例の再現とそこからの作曲実践を愚直に続けていこうと思う。フローニンゲン:2020/4/9(木)19:14

## 5716. 自由自在の創作の境地に向かって

時刻は午前4時を迎えた。今朝の気象は午前3時過ぎであった。

このところは夕食の量が以前よりもさらに減り、消化活動がほぼ完全に終え、むしろお腹が鳴るぐらいのところでは就寝に向かうことができている。就寝中において消化にエネルギーを使う必要がなく、

---

日中の活動で得られた事柄を咀嚼することに睡眠が当てられており、また心身の十分な回復に睡眠が当てられていることを実感する。

闇の中、ポツンと私は1人書斎にいてこの日記を書いている。起床直後、いや身体を起こす前の段階、すなわち目を開けた時のあの喜びの感情を思う。今日もまた創作活動が始まったという途轍もない歓喜である。歓喜により目覚め、歓喜から始まる毎日。今、自分は創作という海の中に、あるいは宇宙の中に浸り切っている。

振り返れば、日記の執筆に本格的に取りかかり始めたのは2015年の夏ぐらいからのことであり、作曲を始めたのは2017年の9月1日、絵画に関してはつい数日前である。いずれもまだ日が浅い。とりわけ作曲や絵画に関して言えば、それらは自分にとって未知の領域であり、専門的な教育など何一つ受けていないのだから、本当にまだまだこれからである。ここから数年間は徹底的な基礎鍛錬の時期になるだろうか。

ここから数年というのは短すぎるかもしれない。一生涯鍛錬は続くであろうから、そうした年数を設定することはそもそもお門違いなのかもしれない。ただし、今から数年後の自分の姿を想像してみよう。仮に今と同じような鍛錬を毎日数年間継続させていくとどうなるか。例えば3年後の自分はいかような日々を過ごしているだろうか。

日記の執筆を本格的に始めてから3年後のことを思うと、作曲や絵画の創作をこれから愚直に3年間続けた後に待っている自分の姿に期待がかかる。それは過度な期待ではもちろんなく、そこに待っている新たな自分と出会えることの嬉しさが今この瞬間にある。3年後の自分を今想像した時点で、その自分は今ここにいるのである。この意味が伝わるであろうか。ある事柄を想起した瞬間に、それは今この瞬間に顕現するのである。

ここから数年間創作活動に明け暮れた後に待っている自分。おそらくその時の私は、自らの言葉・音・イメージを自由自在に創造することができつつあるのではないかと思う。

今のところ想定している残りの人生は85年ほどだが、80年を切る前になんとかそうした境地にいたいと思う。自由自在に、尚且つ無限に、膨大に自分の言葉・音・イメージを創造し、それを持って自らの内面宇宙を形作っていく日々を残りの80年間過ごすこと。そうした人生を生きたいと強く思う。

---

---

今日は満月が見えないと思っていたが、昨日よりも早い起床であったから、月の位置が昨日とは違っていただけだった。書斎の窓辺に歩み寄って、まだ明けぬ早朝の空を見上げると、月がポツカリと浮かんでいた。それはポツリと浮かんでいたのではなく、ポツカリと浮かんでいた。私に見られた月は、もはや独りではない。月を見る前の私は独りであったが、月を見てそれを認識した瞬間にもはや独りではなかった。

創作、創作、創作。今日もまた創作に明け暮れる1日となる。フローニンゲン:2020/4/10(金)04:35

### 5717. 毎日を祝日として過ごすことの大切さ

書斎の机にはカレンダーがある。カレンダーと言っても立派なものではなく、フローニンゲン大学が毎年大学関係者向けに発行しているA4一枚ほどの年間スケジュールを今でも毎年プリントアウトし、それを机の上に置いている。毎朝起床と共にその日に鉛筆で丸印をつけることが朝の日課の1つである。今日も同じように丸印をつけたところ、本日の表記が祝日になっていた。

何の祝日かと思って調べてみたところ、今日は“Good Friday”という祝日らしい。何のひねりもないシンプルなネーミングに思わず笑みがこぼれた。今日は「良き金曜日」とのことである。Good Everydayのような形で毎日過ごしている私からしてみると、わざわざ祝日にそのような日を設けてもらわなくていいのだが、一応そうした祝日があることを有り難く思おう。事実このシンプルなネーミングの祝日を知った瞬間に、自分は毎日が良き日であり、毎日が祝うべき祝日であると気づけたのだから。

祝日という構成概念についてもよくよく考えてみると、ひよっとすると多くの人たちにとっては、国によって制定された祝日だけが祝うべき日としてみなされているのではないだろうか。そのような認識を持っているとすれば、直ちにそれは捨てるべきだろう。毎日が祝日ではない人生を過ごすなどというのはおかしいことすぎる。いつから私たちは、祝日を他者や社会に委ねることになったのか。祝うべき日というのは自ら制定するべきであり、自らの人生を毎日十全に生きているのであれば、毎日が祝日ではないというのはおかしい話ではないだろうか。

Aを規定した瞬間に、not-Aが措定されることを忘れてはならない。つまり、祝日という境界線を引いた瞬間に、祝日ではない日が存在してしまうのだ。祝日とそうではない日々、しかも国が制定する

---

---

祝日の数はたかが知れているのだから、圧倒的多数の祝日ではない日々を過ごすのは馬鹿げなことではないだろうか。祝日などとは無縁に毎日輝いている月がそのようなことを述べている。

今日は国が制定した祝日とのことだが、街の中心部のオーガニックスーパーは通常通りの営業とのことなので、予定通り、本日買い物に行こう。実はiPad Pro本体は届いているのだが、Amazonに注文したケースカバーは届いておらず——Prime会員なのだが、オランダのアマゾンでは配達が遅いのか、それとも現在のコロナウイルスの蔓延によって物流が麻痺しているのか定かではない——、ケースカバーなしでそれを持ち歩いて傷をつけたくないの、今日はそれを持参しない形で街の中心部に出かけていく。写真を撮影するのはまた今度にしよう。

今日もまた、作曲理論書の譜例を参考にして曲を作っていく。また、毎晩夕食後に作っている原型モデルを参考にして曲を作っていく。前者に関して言えば、今後はより一層プロ棋士の学習方法を参考にしたいと思う。彼らがいかに棋譜と向き合い、棋譜並べを通じてどのように学習をしているのか。そのあたりのことに興味を持っていく。

いまだ現存する徴兵制度的な日本の受験を経験した身として、受験を通じて1つだけ作曲実践に役立っていることがあるとすれば、それは受験数学の学習方法だろうか。当時の学習方法を思い出しながら、活かせることは全て作曲実践に活かしていく。

今日もまたこの後少しばかり絵を描こう。夢の振り返りをした後に、夢から喚起されるものを絵にしておきたい。現在デジタル空間上で油絵を描いているのだが、デジタル上であれば絵の具を思う存分使うことができる。絵の具の無駄使いと思われてしまうような使い方もできてしまうことが魅力である。

今後は、作曲と絵画の親和性と相互作用を観察し、それについて考察していこう。作曲と絵画の創作を行き来し、音とイメージの往復運動の中で毎日を過ごしていく。その合間合間に言葉の世界に参入していく。人間世界と人生は、言葉・音・イメージを三大要素として構成されているのではないかと思うのだ。フローニンゲン:2020/4/10(金)04:58

---

## 5718. 今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。今、1羽の小鳥が高らかな鳴き声を上げ始めた。このようにして闇の世界の中に身を置いて心を穏やかにしていると、どこからともなく潮騒が聞こえてくるかのようだ。

つい今し方、1枚ほど油絵を描いた。ここしばらく絵の具が肉厚過ぎると思っていたところ、薄さも調節できることによりやく気づいた。これによって、肉厚感を出したくない箇所をどのように表現すればいいのかの道が少し開かれた。このように、毎回の絵画の創作から新しいことを学んでいこう。

今朝方はいくつか印象に残る夢を見ていた。それらについて振り返り、早朝の作曲実践に移ってきたい。

夢の中で私は、実際に通っていた中学校の体育館に似た場所でバスケの試合に参加していた。試合終了後、偶然その場にいた父と話をし、今日の試合では事前に対戦相手について集めた情報があまり役に立たなかったと伝えた。すると父が、何かの道の達人の知人から聞いた話を教えてくれた。

その達人曰く、「日本人が物事をなす時に必要なのは、大量の情報ではなく大局観です。それを養わないといけない。現代は無駄に多くの情報に溢れており、人々は方向性を見失っています」とのことだった。その言葉を聞いた時、随分と考えさせられることがあるなと思った。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私はこれから野球の試合会場に向かうことになっていた。荒野のような場所で友人たちと話をしていると、そこに1台の大きなワゴン車がやってきた。運転席から出てきたのは、長年の付き合いのある私の知人だった。その知人の方は、どうやら私たちを野球会場まで送迎しにやってきてくれたようだった。ただしその方はあまり機嫌が良さそうではなく、車を私たちに汚されたくないという思いがあったのか、車に乗ったらすぐに靴を脱いでくれとお願いされた。

5人ほどの友人たちと一緒に車に乗り込むと、すぐさま出発となった。出発してすぐに気づいたが、その方の運転はお世辞にもうまいとは言えなかった。荒野を抜け、山道を走り始めると、車がガード

---

レールの方に近づいていき、谷に落ちるのではないかと冷や冷やする場面が何度もあった。その後、田圃道を走ることになり、田んぼに落ちるのならまだいいが、今度また山道を走る時に谷に落ちたら怖いので、私はすぐにでも降りたいと思ったが、もう少し乗車することにした。

すると、前方からバイクに乗った集団がやってきて、対向車線をはみ出して車にぶつかりそうになった。その時に私は、この車が左ハンドルであることに気づいた。運転している知人の方も冷や冷やしており、同時に腹を立ててもいた。バイクの集団が去ったと思ったら、今度は背後から尋常ではない速さで自転車を運転する中学生の男子たちが現れた。彼らは車と同じ速度で自転車を走らせているのだが、表情は平然としている。彼らの人数は7人ぐらいであり、どうやら他校の生徒のようだ。

最近私と同名の男子が転校してきて、彼は今同じ車に乗っている。彼曰く、その自転車集団は、彼が元いた学校の生徒らしい。彼らは私たちの車の横にピタリとつけ、転校してきた彼を挑発し始めた。なぜか私はそこで寝たフリをし、彼らが過ぎ去るのを待つことにした。

最後の夢の場面では、私はある日本の中高一貫の名門校の説明会のようなものに参加していた。説明会は体育館で行われており、説明会のために体育館が装飾されていた。説明会が終わり、その場でしばらくたたずんでいると、実際にこの学校に通っている生徒の母親とその妹らしき人が話しかけて、この学校について立ち話をした。私は別にこの学校に入学するわけではなかったのだが、この学校について興味深く話を伺った。その後、体育館を後にしようと思った時に、自分の意識が夢を見守るものに変化した。私の意識は依然として体育館にあったが、そこでの主人公は中学1年生ぐらいの女の子だった。

説明会に参加していた子供たちが続々と体育館から出ていこうとしていた。体育館の入り口では、スタンプを押してもらうか、手に持っている何かと引き換えに記念品を受け取れるようになっていた。説明会の前に、体育館ではカードゲームの大会が行われていたようであり、記念品をもらう代わりにスタンプを押してもらおうというのは、引き続きゲームを続行するという意味を持っているようだった。

体育館から外に出ていく子供たちは、みんな記念品を選んで受け取っていた。ところが、その女の子だけがスタンプを押してもらうことを係員にお願いしたのである。するとその場にいた係員の中年男性は目を丸くして驚いていた。というのも、ひとたびカードゲームを続行すると、そのゲーム

---

で勝たなければ記念品はもらえないことになっており、しかもそのカードゲームの対戦相手は、そのゲームの世界チャンピオンだったからだ。その係員の男性の横には、初老を過ぎた世界チャンピオンがその場において、2人一緒になって、女の子の意思をもう一度確認した。念を押すかのように、その場にいるのはこのカードゲームの世界チャンピオンであり、彼にゲームで勝たないと記念品はもらえないということを彼らは女の子に伝えていた。

するとその女の子は、もうそんなことは知っていると言わんばかりの表情を浮かべてそこに立っていた。係員と世界チャンピオンはやれやれといった表情を浮かべながら、ゲームの対戦場に彼女を案内した。

体育館の右端に対戦場が設けられており、そこでゲームが始まった。ゲームが始まってみると、世界チャンピオンの手札はすこぶる良く、一方、女の子の手札は最悪だった。世界チャンピオンは女の子の実力を最初から軽んじており、色々と無駄口を叩いていた。案の定、序盤は世界チャンピオンが圧倒的に優位であった。しかし、その女の子は至って冷静であった。しかも彼女は世界チャンピオンの心理的性格を全て把握しており、尚且つ世界チャンピオンの能力が自分よりも低いことを早々と見抜いていたようなのだ。いや、それらはいずれも戦う前から分かっていたようなのだ。

世界チャンピオンが再度無駄口を叩いた後に、女の子は、自分のライフポイントが20を切ってから一気に形勢逆転することになると世界チャンピオンに伝えた。すると、世界チャンピオンは笑いながら、そんなことが起こるわけないと述べた。それに対して彼女は、大逆転された後に、精神的に大きなダメージを受けることになるが、それでもいいかと世界チャンピオンに確認の言葉を述べた。それを述べた女の子の表情と目が真剣であったためか、世界チャンピオンは思わずゴクリと唾を飲み込んだ。その後、その女の子は本当に筋書き通りの大逆転を果たした。フローニンゲン:2020/4/10 (金)06:19

#### 5719. 活気が戻りつつあるフローニンゲン: 自画像を描き終えて

時刻は午後7時を迎えた。今、夕日が1日を締め括ることを祝っているかのように輝きを放っている。後1時間ほど夕日を拝むことができるだろうか。ここ最近はずっかりと日が伸びた。サマータイムに入ってからしばらく経つが、夕日を拝める時間が長くなっている。

---

今日は夕方に街の中心部に散歩がてら買い物に出掛けた。すると、街に少し活気が戻っているように思えた。人の数が若干増え、開いている店も増えた。さらには、街の中心部ではいつものように市場が開催されていたのである。しかし、1.5mの距離を保つような看板が立てかけられていたり、客同士が密接しないように列で並ぶための工夫などが施されてあった。実際に私が入った店では、いつもは店員が商品をバーコードで読むところを客が読むようになっており、支払いもカードが原則になっていた。フローニンゲンがコロナウイルスから解放されるのはもう少し時間がかかるようだ。

今日は午前中の時間と午後の時間を使って、自画像を描いた。ちょうどパソコンの中に、今から2年前ぐらいに撮った写真があり、それをもとに油絵を描いていった。人物画を描くのは初めてであったため、随分と苦戦を強いられた。肌色を作ることが意外と難かしたり、光の当たり具合によって表情の色が変わっている点を表現するのが難しかった。また、「画竜点睛を欠く」や「仏作って魂入れず」という言葉の意味深長さを知った。肝心の眼を描く際に、単純にピュアな白と黒で描こうとすると、生氣のない目になってしまうことに気づいたのである。私たちの目は、実際には複雑な色で構成されているようだ。

自分の顔をまじまじと眺めながら絵を描いたことは初めてだったので、色々と発見があった。それは自分の顔に対する発見というよりも、人間の顔全般に関する発見である。それは上記のような発見事項に始まり、他にもいくつかあった。

今回苦戦しながら自画像を描いたことによって、技術上の新たな課題がいくつか見付き、今後はそれらの課題に少しずつ取り組んでいこう。また気が向いたら、同じ写真か、写真を変えて、自画像を描くことに挑戦したい。描き終えた絵を見ると、指名手配犯の似顔絵のようになってしまったこともあり、ぜひまた挑戦したいと思う。

また、写真は少し微笑んでいたはずなのだが、なぜか描き終えた表情を見ると、顔が笑っていないことにも気づいた。このあたりも、口元や頬の塗り方に問題があったのだろうと思われる。自分でも笑ってしまうような絵が完成したが、こうした笑いが起こることもまた絵を描くことの楽しさである。フ  
ローニンゲン:2020/4/10(金)19:23

---

## 5720. 名前に隠された人生の目的

時刻は午前6時半を迎えた。今朝もまた、小鳥たちが美しい鳴き声を上げている。それは外の世界に高らかに鳴り響いていて、早朝の静かな世界に染み渡っていく。彼らの鳴き声は、自分の内側の世界にも染み渡っていく。

つい先ほど、音楽を聴きながら踊りを踊っていた時に、書斎の窓の外を見ると、裸の木の枝で一悶着があった。1羽のハトが木の枝に止まっていて休んでいたのだが、そこに1羽のカラスのような黒い鳥がやってきて、ハトを追い出したのである。

その木の枝には別に餌があったわけでもないように思えたので、私はそれを不思議に思った。単にカラスは利己的な衝動からハトを追い出したように思えた。木の枝に止まったカラスは少し誇らしげに見えたが、私からすれば滑稽だった。止まるのに適した枝はもっと他にたくさんあったのだから、何もその枝に止まる必要はなかったのではないかと思う。誰かが止まった場所を奪いたかっただけなのだろうか。そのカラスの姿は、まるで地位やポジションを奪い合う愚昧な人間たちのように思えた。

今朝もまた満月が見える。白味がかった青空の上空に満月が浮かんでいる。それはこちらに微笑みかけてくるかのような優しい光を発している。天気予報を確認すると、嘘のように晴れマークが続いている。秋以降からつい先日までの鬱蒼とした天気が嘘のようである。毎日どこかのタイミングでほぼ必ず雨が降っていたあの日々が嘘のようである。今日明日は最高気温が20度前後となり、大変暖かい。一方で、来週の月曜日と火曜日はまた気温が下がり、最高気温は9度ほどになるとのことである。

行ったり来たりを繰り返しながら新たな季節に向かっていくフローニンゲン。自分もまた自らの人生の新たな季節の到来に向けて、様々な観点において行ったり来たりを繰り返すのだろう。

数日前に協働プロジェクトに関するオンラインミーティングがあった時に、協働者のある方が大変興味深いことを述べていた。「人生の目的は、自分の名前に組み込まれている」とのことである。自分の名前をひらがなに分解して並び替えてみると、人生の目的が思わぬ形で見つかるかもしれないとのことだった。ただし、それを自分でやろうとすると、自分の認識の枠組みが邪魔になるためにうまく

---

---

いかない可能性が高いそうだ。できれば他者にやってもらうのがいいとのことだった。それを聞きながらも、自分で密かに並び替えを試みたくなるものである。「かとうようへい」を並び替えると、どのような人生の目的が見つかるだろうか。

今名前を並び替えてみた瞬間に、自己が自己の外に出た。自己が既存の認識の枠組みから外に出たのである。これは昨夜も体験していた出来事だった。就寝前に音楽に合わせて無心で踊っていると、自己が己を越え出ていき、あの静かな境地に至ったのである。ここ最近では、こうした自己超体験をすることが多くなっているように思う。

こうした体験は、日常の何気ない瞬間に突然やってくることが多いのだが、無心で踊りを踊るというように、瞑想的な特殊な意識状態によって起きることが多いことにも気づいている。言葉を介在した思考を働かせない脳の状態と意識状態にはやはり何かがある。自己変容的な作用がそこにあることが見て取れる。フローニンゲン:2020/4/11(土)06:48